

魅せられて綴る藩文学（十五）

藩学「四教堂」と先哲

勝間田 三千夫

（会員 佐伯市中村北町）

第三節 東上の旅

（つづき）

文政六年十二月三日、大学校内で事件が起こった。この変事は、聖堂の学生会津藩の臣狩野軍平が、肥前藩の臣西村有蔵という者を怨む事あつて切殺し、また同じく肥前の臣吉村藤兵衛・津軽藩の臣松井慶蔵を傷つけ、同藩の臣黒瀧藤太が軍平を擒にす。という事件である。それは米華が林祭酒に召されて外出しようとするときであつた。この変を聞いた米華は行きて黒瀧藤太を助けた。その事を古賀・依田二博士に聞いた祭酒は官に告げ、町奉行は罪人及び諸生を召して訊鞠した。時に米華は文記答辞し、始末宜しきを得たので奉行もいたく称誉し、こ

れによつて米華は擢んでられて、斎長助勤となり俸二口を給わつた。

この大学の變事は、翌七年正月二十六日に至つて淡窓のもとに知らされた。「得益多江戸書。及其父書。載大學變事。」と、しかしこの變事は、此日以前に淡窓は耳にしてゐた。諸國を往来する文人達の風の噂か、その知らせによると、益多が殺されたという知らせだったが、淡窓は「子玉ハ容易二人ニ殺サルベキ者ニ非ズ、必ズ誤リナラン」と信じていた。この書に接して、胸をなでおろしたことであらう。

いま紹介する米華の東都に在つて作つた「箒」「綬」の二詩は、この事變を叙した詩である。

箒

琅玕誰削斑龍骨。棕櫚巧結夜叉髮。
家有敝帚享千金。不啻容易拂塵粉。
掃除天下吾豈敢。救關當刀聊借君。
明朝太史上封事。東壁之符星如慧。

綬

白玉雙環飾劍首。環中垂々懸長綬。
人能縛處處噬人。眼前禍福一繩糾。

有客蒼鬣性粗豪。不負平生縛麟手。

兩手在背面在前。轉瞬之間虎爲狗。

「淡云。米華在昌平鬻有格鬪事。此与下篇皆其所作寄筆寄交」とある。これは右二詩のことと、米華著作『愛琴堂詩醇』二巻一冊の内容を述べたもので、つまり下巻は東都に在つての詩作篇である。

また『愛琴堂詩鈔』一冊があるが、鈔とはいへ両書は殆ど同じ内容をもっている。先ず上巻筆頭に「米華先生墓碑」廣瀬健撰とあり、以下淡窓廣瀬先生批評。豊后中島如玉子玉著として、米華の漢詩が認められている。その詩篇は米華著作『愛琴堂集』七巻や、淡窓の『宜園百家詩』等々秀作は諸書にみられるので割愛するが、巻末に古賀穀堂と清風楼主人が観た跋文があるのでこれを記す。

跋文

每觀子玉詩文一著高一著遂日進歩不可涯涘不知數年之后其所造詣如何詩人家往々綿力薄材好不下人手寸鐵徒張空拳不知識者之胡盧乎其側子玉才力足稱患多而有苦亡實若虛是其所以日進而不已不特詩文而已也

乙酉仲春穀堂觀

彫龍之手蘭芝之言落相從天外來匪夷所思何者中郎能辯此事足使藝園諸老吐舌三尺展閱之餘不覺絶叫穀堂

觀

奇想奇筆多々益辯自今而後才思遂年而其摩幹墨入杜室者亦必有日矣憾不及見之也

甲申仲夏梅雨濛々中清風楼主人觀

子玉が曾て宜園に在て肥後を遊學した時、面識をもつ穀堂は夙に詩才を知っていた。それから四年、今子玉の詩文に接し一段と學問などの深さを知り、高一の著である、また詩想の思いつきは極めて高く不覺絶叫と評している。清風楼主人は奇抜な思いつき、すぐれた筆跡、すぐれた考えは目標の人と同じ程度に達したと評している。

一方、文政七年正月二十七日は咸宜園の月旦評も改まる日であった。益多の後輩後藤謙吉が七級下に進んだ。しかし、是日を以て益多は正式に除名され席次表からその名札が外された。この時にあつて淡窓はいう、

「益多七級上ヲ加ウルハ、月旦アリシヨリ前後一人。

其大婦ノ後、虚名ヲ以テ諸人ノ上ニ冠スルコト凡一
十八月。ツイニ追及者ナシ。亦前後ナキコトナリ。」

淡窓は今日且に名を録する者は凡一百三十八人、益多
が大婦して二年四ヶ月の間その名を諸人の上に冠し、勉
勵してきたがその功は遂に見られなかつた。と、感激を
深くし、寂しくも席次表から益多の名札を除いたのであ
る。

米華は、自分の文学的・学問的な可能性を試してみよ
うと、例えば狐の嫁入りや、丑詞詣りを長詞に詠んでい
る。その作品「狐公嫁女詞」は小説『迎朗鼓』にヒント
を得、また「牛蠱」・別題「牛時咀」は李長吉の体に摸
して作ったものである。

七言古詩

牛蠱。倣李長體。

絳唾垂淚鏡花澁。古道無人蛇夜泣。

女羅烟梟月色青。老牛欲出風飄々。

石壇拜神々不言。翠嵐如雨鈴聲濕。

茜裙娘子羅帶垂。滿面宿垢蝕蛾眉。

高杉根枯木魅死。金釵夜椽無人知。

仰天一笑狐犀白。雲黑氣腥夜凄其。

狐公嫁女詞

狐公祠前日映雨。怪底妖雲陰作晴。

古塚阿紫窈窕姿。人道姐姐是前生。

絲興嫁與玄邱客。梁間綏々成遂行。

松葉爲釵球爲佩。九尾曳來寶帶輕。

腋下自有千金裘。粧奩嫁具不他營。

一堂華燭耿降燐。小妹環侍暈蛾青。

欺得山君威加燬。百獸陪宴爾無聲。

上客狸公腹爲鼓。崩々肯々迎郎鳴。

合巹纔罷洞房闋。爲雲爲雨夢初成。

一死寧忘首邱志。千秋長結同穴盟。

野史商量何荒唐。漫將胡說誰孫嬰。

我亦遊戲紙枯筆。只恐人傳董狐名。

また、この年（文政七年）米華は二つの短歌を作つて
いる。

文政五年に山陽が作った『芋』『焼肉』の二短歌「これ
は唐宗の事を詠んだ李西崖の擬古楽府を見て新たに其の
体を用いて本邦の徒とを詠ず」（米華著、日本詠史新楽
府後記）に倣つて、米華も『咬炒豆』『兒素餐』の二短

歌は二大儒を詠んだものと、二大儒とは、時代的にみて学派折衷学が主流をなして考証学の起こった時期に当たるので、仁齋・徂徠の二老儒を詠じたものであろう。

その米華の二短歌を紹介する。

咬炒豆

咬炒豆。罵英雄。英雄眼孔大如豆。渾落斯翁牙齒中。

豆既。盡。罵無窮。知否今日耳食徒。拾翁唾餘亦罵

翁。

兒索餐

兒索餐。婦索錢。一衣賣向平安市。兒腹雖飽父肌寒。

兒莫泣。婦莫嘆。吾有一團和氣在。々々宇宙搏爲丸。

此詩はまた仁科白谷の『十九友詩』に詩選された詩の内二首であり、米華『日本詠史新樂府』六十六首の附、旧作二首として、計六十八首とした詩である。(後述)

米華はかつて文政元年に山陽が西遊し、日田に淡窓を訪ねた時、親しく自己の才力を認められたのであるから、この昌平校遊学の期を満たした後、何れ自分の学問仕上の爲には京摂に遊ぶことが運命と、自己に誓っただけに、

江戸にあつても東海道を往き交う儒者に親しく、山陽の近作を尋ねては書写してこれ残し、倣して詩を賦していた。米華がいかに深く、山陽の才識に傾倒していたかが伺えるのである。

文政七年九月には、前述した松崎慊堂とも文士の交わりがあつたことが、その著書『慊堂日曆』の中に記されている。「九月十五日、中島益多豊後佐伯侯の士、名は大寶、字は子玉。また文士。」とあり、米華はこの日慊堂と初面したことになる。後、文政八年七月十九日には海鷗集を評す席に、古賀穀堂、有馬長照(久留米の大夫)、本庄謙(久留米の儒者)、西島殷(蘭溪)と列している。

その時古賀穀堂が「留學生安倍仲麿に与うる書に擬す」の評から始まり、「人の松原に遊ぶを送る序」の評は、古賀穀堂一篇、中島大寶(号は米華、豊後佐伯の人)一篇と一題五篇とした。慊堂はこれを評して各自佳趣あり、而してその合格を求むれば、本庄謙の一篇は蕪、西島殷の一篇は浮であると、穀堂・大寶は合格だといふのである。子玉は詩文に於て清新流利、筆は意に先んじて走る、と淡窓に評されているだけに解することが出来る。

中島米華が文士といわれるに至つたのも、この慊堂によ

るものと思われる。

また、この頃佐伯侯の所蔵本が懽堂の周辺にあったことは注目される。懽堂は冠山侯と親しみ深く、冠山侯は佐伯侯と親しみ深くしていたことから考察すると、佐伯侯の所蔵本が、江戸文学に大きく貢献したことは当然だろう。米華はこれら諸先生に親炙して、その薫陶を受けるところが最も多かつたのである。

第四節 佐伯藩儒官登用

かくして中島米華は、江戸遊学の期を満たして帰国の途についた。その時期は『遠思楼日記巻五』によると、文政八年六月朔「得中島益多書。以前月二十一日自江戸帰云」とある。この事からすれば、米華の書状が淡窓に届いたのが文政八年六月朔日であり、書面から米華は、一月前に帰国していることになる。

従って、米華は文政八年四月二十一日頃江戸を出発して、五月二十一日頃に帰国したことになるが、前述の『懽堂日曆』から見ると、この頃は未だ江戸に在り、つまり文政八年七月十九日の日曆に既述しているように、懽堂博士と会席している。この両者の違いは、いずれも信

憑性の高い日記によるものであるから、遺憾ともしがたく、筆者は一年のずれがあれば、理路整然とすることを嘆く。

ともあれ米華は帰藩し、藩侯に擢んで儒官となり、新に俸禄を賜い、位は中小姓格に列せられ父の上に出て、人は父の後を嗣ぐものと「時論之」榮としていた。米華は別に一家を興し、居を向島に設けたのである。「東都より帰る。国君擢んで儒官となす。新に俸禄を賜り、位は父の上であり。人は父の後をつぐものと、時に論は之を榮とした。」と中子玉傳にもある。

当時、藩の学制の一つに家塾、寺子屋設置の制度があった。この開設にあたっては、才学能書の者は何人たりといえども自由に開設することが出来るとあり、藩侯毛利高泰は、文学の振興に務める人で、士族の中で家塾を設ける者には塾舎を建設し、敷地と共に之を与えることとしていた。

よって、米華は中小姓格に列し、一家を別に興した時、この恩賞によって家塾を開設したものと推察される。別紙「佐伯藩家塾寺子屋」の通り、天保三年（一八三二）の調査に見ると開設年月は不明であるが、所在地は向島、

身分は士、塾主中島益多とあり、学制に適っている。

さて、閑話休題。米華中島大寶歳を重ねて二十五年は、八代藩主毛利高標侯が没して二十五年に当たる。寛政の文学三侯の一人にあげられた高標侯は、蔵書家、碩学と偉名を持ち、殊に教育に関する業績は、他に群を抜いた偉大な功績を治めた人であることは、改めて申すまでもない。侯自ら著作した『雅衍』二十二巻の大著があるが、その生涯に編集には至らなかった。よってその編集は、九代高誠侯の時、米華中島大寶に命じて、浄書校訂せしめたものである。

「雅衍二十二巻

寛龍公所著

寛洪公恐其久散佚也 文政中命 中島如玉浄書

校訂……略」(梅木幸吉著「覚書佐伯文庫」)

寛龍公とは八代藩主高標公。寛洪公とは九代高誠公のことである。また、如玉とは中島米華(大寶)のことで、致仕後の字名である。

則ち、この跋文は慶応元年九月、水筑之龍(秋月小相)・関信温(関令蔵)楠約文(楠文蔚)が謹識によるものであり、米華歿して三十年、よって如玉としたもの

であろう。

なお『雅衍』二十二巻の浄書、校訂を命じたのは、九代高誠侯ということになるが、高誠は文化九年(一八一二)五月二十五日に長子高翰に譲り、江戸広尾の藩邸に在った。よってこの時十代高翰が藩主となって十四年、三十一歳である。

以上から推察すると、この書付は米華が江戸遊学中に広尾邸に出入りして、広尾公(高誠)が認めた令書に基づき書かれたものではないか、または、広尾公より佐伯藩書物奉行に宛てた書状に、米華に命ずる旨の認めによるものか、の何れかに基づき書かれたものと推察したい。

ともあれ、米華は文政十二年肥筑京撰の間に遊学するまでには、三年有余の時間があつた。この歳月を重ねて『雅衍』二十二巻、六百二十四項目にわたる一大論文を編集したのであろう。

文政九年十二月二十八九日の頃、米華は旧師広瀬淡窓の病を聞き行きて訪ね、十余日留まって、文政十年正月初春佐伯に帰った。

「去臘二十八九日ノ此卜覚エン、中島益多佐伯ヨリ余ガ病ヲ聞イテ、能ト來リ訪ヒ、留マルコト十余日

今春二至ツテ帰国セリ。」

また、此年夏の頃、奥州会津人添川寛平が日田に淡窓を訪ねている。この添川寛平は聖堂（昌平校）の諸生で、米華江戸遊学中の旧友であった。後謙吉が京撰に遊ぶとき、菅茶山の塾にあつて同居している。

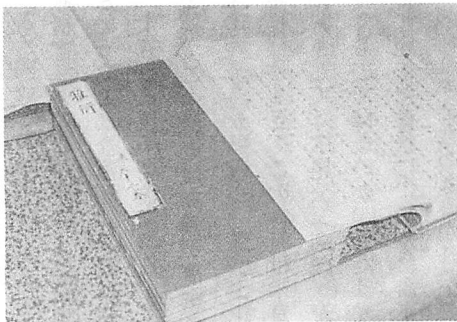
文政十一年米華二十八歳、八代藩主高標侯が二万石の国幣を傾けて、苦心蒐集した蔵書の数は何万巻と言われ、確実にその部数を知ることが出来ないが、その内佳本一千七百四十三部、二万七百五十八本を、十代藩主出雲守高翰侯の時幕府に献納している。幕府は六月に至つて、その内漢籍一万四千二百冊、道藏経四千五百五帖を紅葉山文庫に入れることとし、七月十二日までに受け入れを終わった。献書目録は内閣文庫に保管されているが、閲覧は容易に許されていないようである。

なお献上の時期について、某書に西島蘭溪は文政九年とし、篠崎小竹献諸絵目は文政十年とし、佐伯先哲小伝、大分県被贈位者略伝は文政七年としているが、いずれにせよ献諸目録の作成から献納までの時期は、約五年間に完了したものと考察するのである。

前述の『雅衍』二十二巻が米華によって編集されたの

も、他の儒官ら献諸執務に精力的であつたからではないだろうか。この献納時期について筆者も興味深く、後日解明する事とし、ひとまず文政十二年としておきたい。是年九月十三日、米華は旧師広瀬淡窓に宛てた一通の書状を、佐伯士人大島毅右衛門を使って届けている。その書中はさだかではないが、時も折から幕府献納蔵書のこと、雅衍編集のこと、また、公暇を得て肥筑京撰遊学のことかと推察するのである。

「佐伯士人大島毅右衛門来見」



毛利高標の著書『雅衍』佐伯市教育委員会蔵